

# 大学初年次におけるキャリア教育科目の 授業設計と展開に関する一考察 ——実践型授業の内容とその効果分析——

山 本 和 史

(受付 2016年 5 月 31 日)

## 1. はじめに

キャリア教育についてこれまで議論がされてきているが、児美川 (2015) は、キャリア教育の浸透度は、個別の学校ごとに異なる。また、キャリア教育に取り組む教員の意識にも相当な温度差があるとしながら、少なくとも現時点では、キャリア教育の内容や方法についてはさまざまな議論があるとしても、キャリア教育の必要性自体に意を唱えるような主張は影を潜めているという。他方、キャリア教育の重要性の要因について、実質的な大学全入時代を迎えて大量かつ多様な学生が大学に入学するにともない、大学生としての基礎学力が低下した学生層の発生にあるとしている (花田・宮地・森谷・小山, 2011)。

現在、キャリア教育を教育課程内で実施している大学が96%に達しており、その主な取り組み内容として、職業観・勤労観の育成を目的とした授業は590校 (79%)、コミュニケーション能力、課題発見・解決能力、論理的思考力等の能力の育成を目的とした授業は566校 (76%) である (白井, 2015)。

キャリア教育については、複数の取り組みが実施されているが、いきつくとところ就職活動を成功させるためのキャリア教育に偏重していないだろうか。もちろん、卒業時に就職先が決まっていることは肝要である。しかしながら、ワークキャリアの教育が主になり、ライフキャリアの教育が不

十分ではないか。昨今、多様な働き方が推進されているが、企業で働くだけでなく、副業や地域社会、趣味などパラレルにキャリアを構築し、人生を豊かにしようというハイブリッドキャリアの議論がされている。多種多様なキャリアが考えられる中において、就職活動を目的とした職業観や勤労観の育成だけでなく人生観にも焦点をあて、ハイブリッドキャリアを想定しキャリア教育の授業設計を行わなければならないだろう。また、変化の激しい時代に生き抜く力を涵養されなければならないと考える。これらの目的を到達させる大学生活でなければならない。また、導くキャリア教育でなければならないと考える。

本稿では、A 大学開講のキャリア教育科目「大学生活とキャリア形成」（以降、本科目）の授業設計と展開を考察し、実践型授業内容とその効果について 2 点検証することを目的としている。1 点目は、大学生活の重要性を授業内で共有し、大学生活に対しての自己評価とその要因について議論を行う。大学生活の評価（満足度・充実度）は、ワークキャリア（就職活動）や社会人になってからのライフキャリアに影響する。企業は採用活動の面接時に、大学時代に関する質問を必ず行う。これは、大学生活の経験を通して学生を評価するためである。就職する企業が決めれば、その企業にマッチした教育が行われる。さらに、配属先が決めれば、出会う人たちが想定される。待遇面などで生活リズムも違ってくる。このように、就職先が決めれば、ワークキャリアだけでなくライフキャリアにも影響がでる。既に、議論されてきたが、大学生活の過ごし方がキャリア（人生）に影響を及ぼすといえよう。2 点目は、ハイブリッドキャリア及びビジネスシーンを想定し、生き抜く力を涵養する授業設計を行い、社会人基礎力及びジェネリックスキル（以降、基礎力）を認知、理解、体験、涵養する機会を授業でつくりだし、高められた基礎力を検証する。

本稿の構成は以下のとおりである。つづく第 2 節では、関する先行研究を検討し、本稿の分析課題を明らかにする。第 3 節では、本科目の授業設計の意図。第 4 節は、本科目の授業概要と学習の到達目標を論じ、その

山本：大学初年次におけるキャリア教育科目の授業設計と展開に関する一考察  
後、第5節にて、調査概要の説明と調査対象、分析の焦点。第6節は、分析結果1。第7節は、分析結果2。第8節 考察と課題である。

## 2. 先行研究の検討と問題提起

先行研究を概観するにあたり、3点の視点で論じていく。1点目は、「キャリア教育に関する批判と問題提起」。これらは、キャリア教育の現状と課題を考察する目的がある。2点目は、「大学生活を論点とした先行研究」。本稿で示す授業の目的のひとつが、「大学生活」に焦点を当て議論しているからである。3点目は、本稿においてA大学のキャリア教育を論じるため「キャリア教育実践研究」から示唆を受ける。

### (1) キャリア教育に関する批判と問題提議

児美川（2013）は、大学においてキャリア教育が盛んになったのは、「若者雇用問題」の深刻化が背景にあり、大学生の就職難が続き、各大学がなんとか就職実績を維持しようと、躍起になって学生のテコ入れをはかろうとしたことにあるとし、また、現在のキャリア教育が、職業や就労だけに当たってしまっており、俗流キャリア教育<sup>1)</sup>になっていると指摘している。

下村（2009）は、キャリア教育と就職支援の違いについて、どのくらい将来のことまで考えるかにある。単に就職するというだけでなく、将来にわたって自分の人生を考えるための教育であるとしている。さらに、未来のキャリア教育において、もっと人間性や内面重視という視座が必要とされるべきではないかと指摘している。渡辺（2005）は、教育改革は全教職員が参与できなければ学生のためにも社会のためにも大学自身のためにもならない。学外の専門家にキャリア教育のプログラムの開発やその実践を依頼し、教員は無関心でいるとしたなら、キャリア教育が実践されているとはいいい難いと指摘している。川崎（2005）は、正課教育として教学

---

1) 俗流キャリア教育とは、①「自己理解」系、②「職業理解」系、③「キャリアプラン」系（児美川2013）。

が行っているものをキャリア教育、キャリアセンターなどが実施する正課外プログラムをキャリア形成支援と区別して捉えている。しかし、「大学におけるキャリア教育は正課科目だけで担うべきものではない。教学と事務部門が密接に連携し、キャリア教育をキャリア形成支援の流れの中に位置づけることが最も大切だと考えを示している。

問題提起として、児美川（2015）は、組織が個人のキャリアを開発してくれる時代は終焉にむかいつつあるとした上で、これからのキャリア教育について、自分がなにを大切にし、どう生きていくのかという展望（方向、感覚）のなかに、自らが働くことを位置づけることが求められており、そうしたことができる個人の形成をめざし、そのための準備に資する幅広い教育であるべきであるとしている。更に、教養教育と専門教育という大学本来の教育課程を軸に、PBL やアクティブ・ラーニングを豊かに経験しながら、時には失敗や挫折をも次の目標転換できるような、したたかな夢（希望）の追い方を身に付けることが、これからのキャリア教育の目標になるだろうと主張している。

つづいて、大学生活を論点にした先行研究についてである。五十嵐（2008）は、大学におけるキャリア教育は、新卒学生の就職だけでなく、大学入学から大学生活を視野に入れ、学生が主体的にキャリアを考え、大学で学ぶことを中心に大学生活を構築していくための支援である。また、田澤、梅崎（2013）は、低学年の大学生に対するキャリア教育においては、職業に対する準備よりも、大学生活を有意義に過ごすことが注目されているといえるだろうとしている。上西（2006）は、大学の全学的なキャリア支援・キャリア教育担当者にアンケートを実施した結果として、7割以上の大学が低学年からの全学的なキャリア支援・キャリア教育について、具体的な職業を早期に定めるよりも幅広い見識をそなえ幅広い経験を積ませることが望ましいという方針をもっていることを明らかにしている。

最後に、キャリア教育実践研究の成果と問題に関して、本間（2012）は、大学等におけるキャリア教育実践・具体化の取り組みが始まっている

山本：大学初年次におけるキャリア教育科目の授業設計と展開に関する一考察  
が、高等教育機関におけるキャリア教育は、今尚、開発途上の課題であり、その現場は試行錯誤の最中にあるとあって過言では無い。と、キャリア教育の現状を紹介している。神殿（2010）は、キャリア教育受講後は学生の満足度が高いとした上で、必ずしもその後の意識の変化、行動につながったかどうかについては明らかになっていないとしている。さらに、キャリア教育を受講した学生の経時変化の効果について調査の必要性を唱えている。一方、初年次のキャリア教育の授業の効果について、川崎・澁谷・坪内・町田（2013）は、学生達の将来の進路を明確にするには不十分であるが、ポジティブに自分を捉える態度や、大学4年間を有効活用して将来に備えようとする意欲の向上には寄与していると評価している。さらに、キャリア教育を受講した学生は、進路選択過程に対する自己効力感と結果期待を十分に高めるものであったと評価している（川瀬・辻・竹野・田中、2006）。

それぞれが一定の評価を示しながら課題も明らかにしている。以上の既存研究から、低学年のキャリア教育の重要性が感じられるが、決して就職活動を意識したものではなく、幅広い見識と経験を積ませ、大学生活を有意義に過ごす支援が必要であると考ええる。

### 3. 本科目の授業設計意図について

本科目の授業設計の意図は3点である。1点目は、2年生で本科目を履修する意義と目的を明らかにする。2年生は、1年生にあった周囲からの注目や支援がなくなり、ゼミなどの専門的小集団にはまだ属さないため、教員との交流も多くなり大学コミュニティへの帰属意識を持ち難い時期と言われている（岸岡、山内、泉谷、平尾、2010）。2年生について、Graunk and Woosley（2005）は、特化した学習・生活・キャリア支援などの充実を図る必要があるかもしれない。2年次は、大学入学から1年間を検証し大学生活の目的を再考する良い機会であり、大学生活の重要性を共有する機会でもある。以上の議論から2年次にキャリア教育を行う意義があるだろ

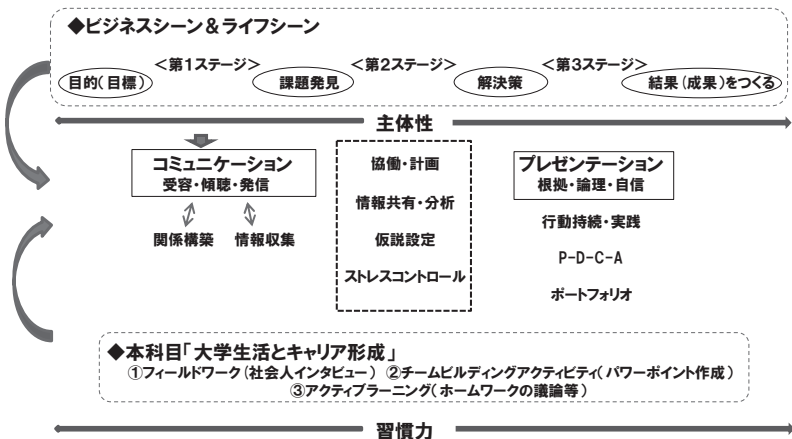
う。2点目は、ワークキャリアだけでなくライフキャリアについて考察できるように広義のキャリアをテーマにしている。講義形式の授業では、広義のキャリアを考察するため複数のキャリア理論について学ぶ機会を設けているが、先輩による講話や社会人インタビューを通して、キャリア理論の理解がより深められるよう授業設計している。単に、就職活動を含めたワークキャリアを意識したものではない。

3点目は、学生が卒業後社会人になり、経験するだろうビジネスシーン（ワークキャリア）やライフキャリアを想定し、授業を構成している。

想定されるシーンは、社会人になり組織に属したとき（ビジネス以外も含め）または、プロジェクトチームの一員になったとき、チームの目的を共有し、課題発見（設定）、課題解決、目的達成（結果）の過程を経験し基礎力が涵養され成長していく。

想定されるビジネスシーンは、3つのステージが考えられる（図表1）。まず、どのような組織であっても、また、プロジェクトチームに属していても個々が主体性をもって参加しなければならない。その上で、課せられ

図表1 ビジネス（ライフ）シーンとキャリア教育との関連性



出所：筆者作成

山本：大学初年次におけるキャリア教育科目の授業設計と展開に関する一考察

た目的（目標）を共有し、その目的を成し得るために議論を重ね課題を明らかにしていく。しかしながら、目的を共有し有効な議論を行うには、各自が持っている情報や様々な考え方を共有するために傾聴力、受容力、発信力を高めコミュニケーションを図っていき、チーム内の信頼関係を構築することが肝要になってくる。これらがビジネスシーンの第1ステージと考える。第2ステージは、入手した情報を共有し分析を行いながら時には仮説を立て、計画に基づいて協働し、課題を発見し解決策を導き出すアプローチである。その間、意見の対立や調整などでストレスが発生するかも知れない。最後の第3ステージでは、P-D-C-Aを繰り返しながら行動を持続させ課題解決策を検証し、目的を成し得るための方向性や提案内容を固める。そして、クライアントに示す。所謂、プレゼンテーションである。プレゼンテーションでは、目的を達成する根拠を論理的に、且つ、自信をもって伝えなければならない。さらに、これらの行動及び思考に関する成功もしくは失敗実績を記録に残すポートフォリオが重要になってくるだろう。様々な経験から得た目的を成し得るための方法が習慣化されてくると個人もチームも自己効力感が高まっていく。以上であるが、ビジネスシーンを3つのステージに分類し、授業設計を行った。

#### 4. 本科目の授業概要と学習の到達目標

本節では、先述した授業設計の3点の意図に副って本科目の具体的な内容について議論を行っていく。まず、本科目の授業概要、学習の到達目標、授業の詳細である。

##### (1) 授業概要と到達目標

本科目の授業は、①講義形式②フィールドワーク（社会人インタビュー）とチームビルディング・アクティビティ（パワーポイント作成）を取り入れたPBL③ホームワークをベースにしたアクティブ・ラーニング④キャリア（人生）をテーマにした卒業生による講話⑤記録を残すためのポートフォ

図表 2 5つのカテゴリと授業のアプローチ

カテゴリ	アプローチ (授業)
講義形式	①キャリア理論                      ②労働法 ③Kさんからのキャリアメッセージ
PBL	①社会人インタビュー              ②チームビルディング・アクティビティ              ③プレゼンテーション
アクティブ・ラーニング	①ホームワーク                      ②グループ学習
先輩講話	①テーマ「広義キャリア (人生)」 ②振り返り時間 (リアクションペーパー)
ポートフォリオ	①コミュニティシート              ②ラーニングストーリー

出所：筆者作成

リオシステムの5つのカテゴリ（図表2）で構成している。

①講義形式

講義形式は、主として「キャリア理論」と「労働法等」と「Kさんからのキャリアメッセージ」の3つである。

1つ目のキャリア理論については、「4つのキャリア理論の学習」を行っている。シュロスバーグ (Nancy K. Schlossberg) の「トランジション (転機)」、クルンボルツ (John O. Krumboltz) の「計画された偶発性理論」、スーパー (Donald E. Super) の「ライフ・キャリア・レインボー」、サビカス (Mark L. Savickas) の「キャリア構築論」である。

4つのキャリア理論の学習の目的は、4点である。1点目は、理論や蓄積されたキャリアの研究を理解し、学生自身の今後の大学生活及びキャリア (人生) に生かす。2点目は、「広義のキャリア (人生)」をテーマにし、社会人インタビュー (フィールドワーク) を行うために必要な基礎知識を高め、表面的なインタビューにならない。3点目は、モデル (インタビュー) を通して、キャリア (人生) とキャリア理論の関連性を認識し、学生自身のキャリアを創造する。4点目は、社会人インタビュー後にチームビルディング・アクティビティを行い、キャリアをテーマにパワー



山本：大学初年次におけるキャリア教育科目の授業設計と展開に関する一考察  
ポイントを作成<sup>2)</sup>する。

つづいて、「労働法・雇用環境・ブラック企業」である。労働法については、身近なアルバイトのケース等を紹介しながら労働基準法に興味を持たせ、さらに、労働法の重要性に気付き、興味関心をもつ機会をつくりだす。また、ブラック企業に関しては、誰も関心のあるところであるが、入社してしまった場合の相談先を知る。労働法等に関しては、「興味を持つ」「理解する」「知る必要性」「気付かせる」の4つの目的をもって行っている。

さらに、「Kさんからのキャリアメッセージ」を講義の中で紹介している。Kさんは、40歳の女性で管理職として企業の第一線で働いておられる。且つ、4人の母親でもある。Kさんの大学生活や社会人になってからの思考及び行動特性は、女子学生だけでなく男子学生にとっても刺激的の多いキャリアメッセージである。特に、大学生活の過ごし方や初期キャリアについては、学生自身の大学生活の見直しと、理想のワークキャリアをつくりあげる根幹を知る貴重な機会になっている。本科目で紹介している「Kさんからのキャリアメッセージ」の仕事に関する一部を紹介する。

#### Kさんからのキャリアメッセージ（仕事に関するメッセージから）

「仕事と家庭を両立することを考えて、まだ、仕事をしてみないうちから両立可能な仕事を探そうとし、楽な仕事や専門的な仕事を考える学生を見かけます。ですが、両立可能な道が開けるのは、若い頃一生懸命打ち込んだ経験によって、仕事をこなす基礎力が付くからです。楽な仕事というのは誰にでもできる仕事なため、簡単に他の人に置き換えられてしまいます。」

短いKさんのキャリアメッセージであるが、学生達の現在と未来のキャ

---

2) 社会人インタビューの内容を持ちいてチームで議論を行いながらプレゼンテーション用のパワーポイントを作成する。

リアに対して問題提起がされている。大学生生活の重要性に気付き、さらに、仕事観を考察する契機になるメッセージである。

②PBL（第7回～第11回，第14回の授業で実施）

授業内で5～7名のチームをつくり，全員が社会人インタビュー（フィールドワーク）を実施する。インタビュイーを決めるにあたって年齢が35歳以上<sup>3)</sup>という条件のみ決めており，条件にあった人を学生が見つげ出しインタビューする日時を決める。対象者が見つからない学生については教員が相談に乗り紹介をするが，殆どの学生は自身で探し出している。社会人インタビュー（フィールドワーク）後，インタビューの情報をチームで共有し，議論を重ねキャリアに関するテーマを検討しながらチームビルディング（チームのゴール：組織行動によるパワーポイントの作成）を5週に亘り行い，議論の内容をパワーポイントにまとめ完成させる。完成されたパワーポイントの内容が今後の大学生生活もしくは未来のキャリアに生かされることがチームビルディング・アクティビティの到達目標である。チームは，入学時から今まで殆ど接点のなかった者同士で構成される。チームが形成された後，課題達成するために役割<sup>4)</sup>を決め議論を行っていく。しかしながら，コミュニケーションが取れないチームがある。とはいえ課題達成日が設定されているので，一定の時間が経つと他チームとの進捗状況の差から危機感を持ち始める。ここからチームが動き出すのである。議論がはじまる。議論がはじまると意見の対立や取り組むスタンスの違いからストレスを感じる学生もいる。スケジュール通り進捗しているか状況を共有すると同時に，スケジュールの見直し（修正）などを行うためにチームで工程表を作成する。

ワークキャリア及びライフキャリアにおいても，課題達成のために個人

3) 35歳以上の社会人であれば，ワークとライフキャリアの両キャリア共，複数の経験をされているだろうと仮定しインタビュイーの条件とした。

4) リーダー（進行役），書記（議論をまとめる），タイムキーパー（時間管理），ShuP 担当（ポートフォリオ作成）。

山本：大学初年次におけるキャリア教育科目の授業設計と展開に関する一考察

が動くだけでなく、チームが形成され決められた時間内に課題を解決する機会が数多くある。本科目では先述したビジネス（ライフ）シーンを想定し、キャリア教育に落とし込んでいる。このような展開の中、各チーム共試行錯誤しながらそれぞれのカラーが構築され、時間内に目標が達成されていく。さらに、完成されたパワーポイントを評価し、上位4チームを選考しプレゼンテーション大会を行う。選考からプレゼンテーションまでの準備期間は1週間。選ばれたチームは、他の授業やクラブ、サークル、アルバイト等があるため、スケジュール調整の課題が発生する。様々な予定が既にはいつている中で、僅か1週間でやり遂げなければいけない課題設定は、学生達にとってには酷な環境である。しかしながら、社会人になれば短い時間内にクライアントのニーズに応えなければいけない場面がある。これらを想定して過酷なスケジュールをあえて設定している。PBLでは、実社会で経験するだろうキャリアをフィールドワーク、チームビルディング・アクティビティ及びプレゼンテーションを通して、基礎力が涵養される環境をつくりだし、自己効力感を高めていくことを授業の到達目標としている。

### ③ホームワークをベースにしたアクティブ・ラーニング

新聞記事による情報共有を目的としたホームワークである。数年後の就職活動を意識し「新聞を読む」という狙いがあるが、それ以上に、同じことを繰り返す「習慣力」を身につけることを到達目標としている。ここでは単なるホームワークで終わらないようにしている。ホームワークの課題は、興味関心をもった記事を10以上持ち寄り授業内で情報共有及び議論を行う。単に10記事ということではなく、1週の間に関心をもった記事を最低1つ選び、関心をもった理由と記事を読み、感想や気付きなどをシートにまとめ習慣化していく。よって、1週間に最低1記事をホームワークで行うルールを設定している。新聞を読まない学生やそれ以前に新聞を取っていない学生にとってはストレスである。そのストレスを打破する思考と解決していく行動が求められる。さらに、それぞれが関心をもった記事を

チーム内で共有していくことに重きを置いている。例えば、自分自身に関心をもたなかった情報を他者が持った理由を共有したり、自分と他者が同じ情報に興味を持ったとしても捉え方が違ったりする。情報を得るという本来の新聞のミッションだけではなく、様々な場面で議論を行いながら社会人として必要なコミュニケーション能力が涵養される。しかしながら、「新聞を読むという授業について、小学生や中学生の時にやったことを、大学生になってやらなければいけないのか。」という疑問をもつ学生がいる。小学生や中学生の頃と今では、同じ記事と接したとしても、受け止め方や理解の仕方が大きく違っている。また、議論する学生達（メンバー）も成長している。当然ながら議論のレベルも違ってくるだろう。

#### ④先輩講話（卒業生による講演）

キャリア教育及び就職支援において、卒業生による講演は殆どの大学で行われているが、よく見かけるテーマとして、卒業生が勤務している企業の情報提供や就職活動を行うにあたってのアドバイスが多い。本科目では、「大学生活がキャリア（人生）を変える」をテーマに講話をお願いしている。講話の主な内容は、自己紹介（卒業年次、出身学科等）、人生の満足度（自己評価）と理由、大学生活の振り返りとアドバイス、ワークキャリアとライフキャリアについて、人生の転機の中のネガティブ転機を乗り越えたエピソード、その他（アドバイス）の7点を中心に講話を進めていただいている。先輩講話は3点の到達目標を設定している。1点目は、入学から1年間の大学生活を振り返る。同時に、残された大学生活を考察する機会にする。2点目は、誰も転機がある。特に、ネガティブ転機について、如何にして乗り切っているか事実を共有する。3点目は、卒業後のキャリアを想定する。ここでは、ワークキャリアとライフキャリアを意識する機会になっている。

#### ⑤ポートフォリオ・システムの利活用

ポートフォリオは2点の目的がある。1点目は、第7回から第11回の授

山本：大学初年次におけるキャリア教育科目の授業設計と展開に関する一考察  
 業で行っているチームビルディング・アクティビティ（パワーポイント作成）について、授業終了時点のチームの現状、課題、課題解決策（具体的な行動）、チェック方法の4項目をチームで共有し記録する。このアプローチは、社会人になって肝要されるP-D-C-Aそのものである。2点目は、本科目の授業から培った内容を4点の項目（「確かな思考」「広がる経験」「開かれた心」「次なる行動」）について記録を残す。記録を残すこと及び報告する行動は、社会人になって必要とされているため、その期待に応える動きにもつながる。

図表3 授業テーマと概要（シラバス）

回	授業テーマ	概 要
1	オリエンテーション	オリエンテーション
2	キャリア（人生）と キャリア理論	複数のキャリア理論を学びキャリア（人生）を考察する。
3	卒業生による講話	テーマ：「大学生生活がキャリア（人生）を変える」
4	企画立案と計画	チーム形成。パワーポイント完成（第11回）にむけて企画を検討し計画を立てる（計画立案力）。
5	キャリアの過去・現在・未来 ～自己認知～	学生個々のキャリアを振り返る。更に、大学入学から現時点までに焦点をあて大学生生活を分析する。
6	コミュニケーション能力と プレゼンテーションの基本	社会人が捉えているコミュニケーション能力を考える。 パワーポイント作成後のプレゼンテーションをイメージする。
7	リテラシースキル ～パワーポイント作成 NO.1～	フィールドワーク（社会人インタビュー）の情報を共有し分析を行う。パワーポイントのフレームワークを考える。チームの現状を共有し、課題発見、課題解決策等議論を行う。
8	コンピテンシースキルを培う ～パワーポイント作成 NO.2～	工程表をチェックし状況をチームで共有。課題等解決しながらパワーポイントを作成しコンピテンシースキルを理解する。ShuPに計画の現状、課題、解決策、チェック方法を入力。
9	コンピテンシースキルを高める ～パワーポイント作成 NO.3～	工程表をチェックし状況をチームで共有。課題等解決しながらパワーポイントを作成しコンピテンシースキルを涵養する。P-D-C-Aを行う。 ShuPに計画の現状、課題、解決策、チェック方法を入力。
10	ジェネリックスキル ～パワーポイント作成 NO.4～	納期（提出日：第11回の授業）を意識し、課題を共有後、パワーポイント作成を進める。ジェネリックスキルを意識し涵養する。
11	パワーポイント完成 ～パワーポイント作成 NO.5～	パワーポイントを完成させ授業中に納品（提出）。 ShuPに計画の現状、課題、解決策、チェック方法を入力。
12	ニュースの情報共有	気になった新聞記事を10週に亘り最低10記事抽出する（ホームワーク）抽出された記事をチームで共有、議論する。
13	キャリアの課題	「労働法」「様々な雇用形態」「Kさんからのキャリアメッセージ」
14	プレゼンテーション大会	選抜チーム（4チーム）によるプレゼンテーション大会の実施。
15	総括	1～14回までの授業を振り返り、今後の大学生生活とキャリア（人生）を考える。

出所：筆者作成

## 5. 調査の対象・方法・焦点

本節では、本研究の調査概要と分析の焦点を説明する。

### (1) 調査概要

本科目の授業設計意図に基づいた授業の到達目標について分析を行った。調査 1 は、大学生活についての問題提起である。大学生活の重要性については、既存研究で数多く論じられているが、その多くは、就職活動との関連性についてである。本稿の目的は、本科目の授業において、大学生活を考察する機会を多く設けた上で、大学生活に対しての自己評価（入学から 1 年間）とその評価要因及び変容させるの必要性を感じた契機について議論する。ここでは、充実した大学生活を過ごしている学生、そうでない学生についても議論を行っている。調査 2 は、ビジネスシーン等を基に授業設計を行った本科目のキャリア教育の到達目標の検証である。具体的には、授業設計に基づいた 5 つのカテゴリーの授業を通して、涵養された基礎力の効果を考察した。学生個々の自己評価ではあるが、本科目の到達目標が明らかになるだけでなく今後の授業改善や学生支援にもつながっていくだろう。

### (2) 対 象

調査対象大学の A 大学は、5 学部 9 学科および大学院 5 研究科を有する地方の文科系総合大学で約 6,000 名が在籍する。

本稿の A 大学の調査対象者は、2 年生のキャリア教育科目「大学生活とキャリア形成」2015 年度の履修生ではあるが、調査 1 と調査 2 の対象者及び対象者数は異なる。調査 1 は、後期履修生 4 学科 438 名の学生から回答を得た。調査 2 は、前期履修生 5 学科 664 名の学生から回答を得た。

山本：大学初年次におけるキャリア教育科目の授業設計と展開に関する一考察

### (3) 調査方法と分析の焦点

調査1と調査2の調査方法は、同じであるが時期が異なる。調査1は、2016年1月の最後の授業で実施し、調査2は、2015年7月の最後の授業で実施した。

調査1では、入学後の1年間の大学生活を振り返り、大学生活を変える必要性に関して、A：全く感じない B：あまり感じない C：やや感じた D：変えないといけない、の4件法を用いて評価分析を行った。さらに、今後の大学生活を変えないといけないと感じた要因や変えなくてよいと感じた要因について記述式を用いた。調査2は、授業を通して自信創出につながった授業内経験、根拠、要因を記述式にして答えてもらい、その上で、涵養された基礎力に分類した。

## 6. 分析結果1（調査1）——大学生活——

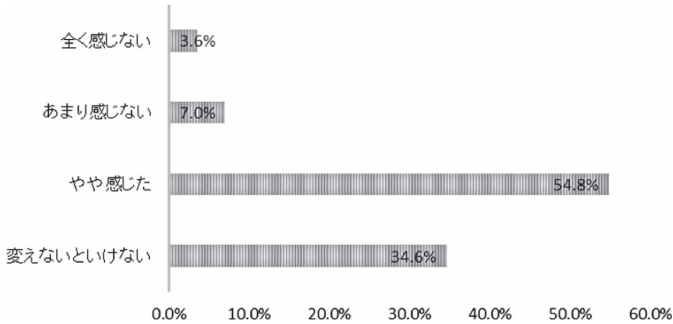
本節は、本科目の授業において大学生活を考察する機会を設けた上で、大学生活に対して自己評価とその要因について議論を行う。

まず、大学生活を考察する機会を設けた本科目について、大学生活の自己評価を求めたところ（図表4）、大学生活を変えないといけないと感じた（34.6%）、やや感じた（54.8%）、あまり感じなかった（7.0%）、全く感じなかった（3.0%）という結果になった。

大学入学後の1年間を振り返り、89.4%の学生が、今の状態のまま大学生活を続けていくことに問題意識をもっていることがわかった。さらに、記述された内容から（1）大学生活の過ごし方（大学生活自体）、（2）自己の行動・思考特性の反省、（3）未来（将来）の行動・思考特性の展望、（4）就職活動の準備、の4点の問題意識が明らかになった。ここでは、授業設計の到達目標である大学生活の重要性に気付くだけでなく、問題意識をもった大学生活に関して具体的な要因にも焦点をあて分析を行った。

つづいて、問題意識をもった4点について、記述された内容を検証する（図表5）。

図表 4 今後の大学生活



出所：筆者作成

### (1) 大学生生活の過ごし方 (大学生生活自体)

今までの大学生活そのものに問題意識をもった学生は、3つのタイプに分けられる。まずは、無目的無気力無感情な大学生活を過ごしてきたタイプ。記述された内容には、「大学生活をただ何となく過ごしていたから」「薄い大学大学生活だったから」「今は、保守的に過ごしているけど、このままだと後で、あの時、ああすればよかったと後悔しそうだと思うようになった」などがあつた。つぎに、大学生活の連続がキャリア（人生）につながると察知したタイプ。記述された内容には、「今の生活が今後のキャリアに繋がっていくこと分かった」「これからのキャリアに大きく係る時期だと思った」「大学生活4年間全てが就職活動だということがわかった」などがあつた。最後は、学びの重要性を認識したタイプ。記述された内容には、「私は、学生という認識が高まった」「勉強した上で、大学生活を楽しもうと思った」「もう少し大学生活を充実させるために勉強に励もうとおもった」などがあつた。自らの大学生活自体に焦点をあて問題を感じた学生は、①無目的、無気力、無感情タイプ②連続性察知タイプ③学び重要性タイプと考えられる。



山本：大学初年次におけるキャリア教育科目の授業設計と展開に関する一考察

## (2) 自己の行動・思考特性の反省

つづいて、自己の行動・思考特性に問題意識をもった学生について考察する。ここでも3つのタイプに分けられる。まずは、過去の行動に関する反省タイプ。記述された内容では、「今の自分が目標を何一つ達成できていないと反省できた」「自分の未熟な部分を知りもっと努力しなければならなかった」「自分のキャリアを形成するのにこのままでは駄目だと思った」などがあつた。つぎに、無計画な行動に関する反省タイプ。記述された内容には、「もっと計画的に進めていかないといけないと思った」「計画を立ててやる大切さが身にしみて分かつた」などがあつた。最後に、無行動に関する反省タイプ。記述された内容には、「自分は何も考えていないし、何も行動していない」「自分が何も行動していないと思った」などがあつた。自己の行動・思考特性に焦点をあて問題を感じた学生は、①過去の行動反省タイプ②無計画反省タイプ③無行動反省タイプと考えられる。自己の行動特性に問題を感じる学生は、過去の反省を軸に問題意識をもつたことが窺える。

## (3) 未来（将来）の行動・思考特性の展望

自己の未来に問題意識をもった学生も3つのタイプに分けられる。まずは、将来をイメージしながら今の重要性を感じ取つたタイプ。記述された内容では、「自分の将来を考えることで、今出来ることをやっておいたほうがいいことが分かつた」「将来を考えた行動をしなければいけないと思った」「いままでの私は、将来のためのアクションを全く起こしていなかつたので、行動していこうと思った」などがあつた。つぎに、未来に向かって自己の行動をテーマ設定しているタイプ。記述された内容では、「もっと積極的に失敗を恐れないように物事に取り組んでいきたい」「いましかできないことや、やってみたいことがあつたら積極的に挑戦していこうと思った」「もっと充実したキャリアを歩んで今後の自分に生かしたい」などがあつた。

図表 5 大学生生活問題意識をもった 4 つの視点

大学生生活自体	選択
社会人の話を聞いて、自分の大学生生活は、あまり中身がないと思ったから	○
今まで思い返せば、薄い大学生生活だったと思ったから	○
今の生活が今後のキャリアに繋がっていくことが分かったから	○
まず、学校を中心に持ってこなければいけないと思った。私は、学生という意識が高まった	○
大学生生活をただ何となしに過ごしていると感じたから	○
大学生生活 4 年間全てが就職活動だということがわかったから	○
大学生としてしなければならないことがまだまだたくさんあることに気付いたから	○
これからのキャリアに大きく係る時期だと思ったから	○
今のうちしておきたいことをしなくてはならないと感じました	○
サークルばかりに熱中し、勉学に力を入れてないことが改めてわかった	
ゆっくり生活をしている場合ではないと思った	
今までの大学生生活で頑張ってきたことがないから	
残りの大学生生活を色々な経験をして過ごしたいとおもった	
まじめに受けようと思ったから	
勉強をした上で、大学生生活を楽しもうと思った	
もう少し大学生生活を充実させるために勉強に励もうとおもった	
大学生生活は今しかできないと思ったから。実りのあるものにしたかった	
今の大学生生活のままでは、単に、無駄な時間を過ごすことになってしまうと思ったため	
授業も授業外の活動を中途半端にしていると感じたため	
今は、保守的に過ごしているけど、このままだと後で、あの時、ああすればよかったと後悔しそうだと思うようになった	
今のままではいけないと思ったから	
キャリア形成に対する意識が変わったことは間違いない	
まじめに受けようと思ったから	
自己の行動特性	選択
今の自分が目標を何一つ達成できていないと反省できたから	○
自分の未熟な部分を知りもっと努力しなければならないと思ったから	○
目標がなかったため	○
自分のキャリアを形成するのにこのままでは駄目だと思ったから	○
自分は何も考えてないし、何も行動していない	○
もっと計画的に進めていかないといけないと思った	
目的にむかって計画的にしようと思った	
経験が少ないから	
今のままでは何も得ることが出来ないと思ったから	
自分が何も行動を起こしていないと思ったから	
いま、少しなまけていると感じているから	
これからの姿勢をもう一度考えなおす必要があると思ったから	
1つ1つのことをもっと丁寧にしっかりやっていくべきだと思った	
自分の足りないものが少しみつかったから	
計画を立ててやる大切さを身にしみて分かったから	
自らの課題を知ったから	
同学年同学科の人のプレゼンテーションを見たときに大人だと思ったから	

山本：大学初年次におけるキャリア教育科目の授業設計と展開に関する一考察

自己の未来（将来）	選択
自分の将来に向けて考えることで、今出来ることややっておいたほうがいいことが分かったから	○
残された時間が限られていると感じたから	○
もっと積極的に失敗を恐れないように物事に取り組んでいきたいと思いました	○
将来を考えた行動をしなればいけないと思ったため	○
昨年は1年間ふらふらしてきたので、今年からは将来を見据えて様々な活動をしていきたい。	
今しかできないことや、やってみたいことがあったら積極的に挑戦していこうと思った	
方向性をもつべきだと思った	
もっと充実したキャリアを歩んで今後の自分に生かしたい	
将来を少し考えようと思ったから	
真剣に将来のことを考えようと思ったから	
今のままでは将来困ると思った	
いままでの私は、将来のためのアクションを全く起こしていなかったので、行動していこうと思った。	
将来やりたいことを見つけないといけないと思った	
今から変われば、まだ、可能性がある	
学んだことを最大限に活用していこうと思ったから	
就職活動	選択
就活期が近付いているという実感が持てたから	○
就職についてもっと必死に考えようと思った	○
就活のために準備するため	
就職活動にもっとやる気をもとうと思った	

作成：筆者作成

\*○印は、4件法のアンケートの中で、大学生生活を「D：変えないといけない」と思った学生の記述内容。

最後は、危機感をもったタイプ。記述された内容では、「残された時間が限られていると感じた」「将来を考えて行動しなければいけない」「今のままでは将来困ると思った」などがあつた。残された時間が限られているというのは、大学生活に関しての時間である。自己の未来に問題意識をもった学生は、①将来イメージ対策タイプ②行動テーマ設定タイプ③危機感タイプと考えられる。

#### (4) 就職活動の準備

最後は、就職や就職活動を考える契機になった学生であるが、記述では、「就活期が近付いているという実感を持てた」「就職についてもっと必死に考えようと思った」などであるが、就職活動に関する内容は少ない。数値が少ないことから、この授業が、就職対策にシフトされたキャリア教

育でないといえるだろう。

### 6-2. 分析結果 1-②（調査 1）——大学生生活——

大学生生活を変える必要性を感じなかった<sup>5)</sup> 学生について焦点をあてる。その要因は、「入学直後から今まで充実しているので変える必要性を感じない」「今の大学生生活に満足している」など大学生生活に前向きな学生だったことが明らかになった。本来であれば、大学生生活を変える必要性を感じない学生の割合が多いことが望ましい。本稿のテーマから少し外れるが、大学入学直後から 1 年間を通して、大学生生活が充実し満足度が高いと自己評価できる学生を多くつくりださなければいけないだろう。大学入学時の心理状態は、入学までの過程によって異なると思われるが、ネガティブ入学の学生層や大きな不安を抱えている学生も含めて、対応が必要である。そのためにも初年次教育や、教職員の学生への関わりなどを再考する機会が必要である。この件は、本稿の課題から外れるため今後の課題とする。

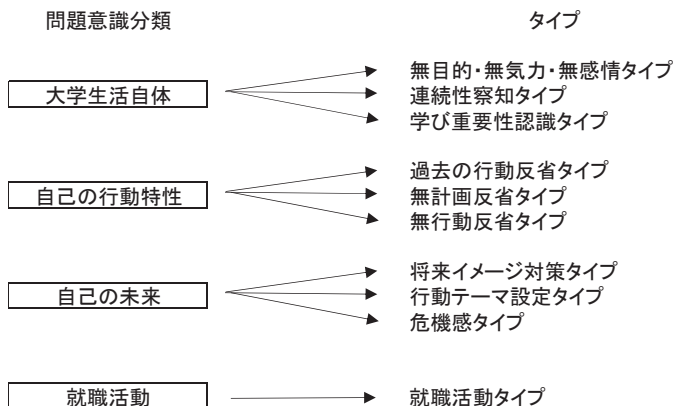
### 6-3. 小括（調査 1）

以上のように、大学生生活の 4 点の問題意識要因が 10 のタイプに分類されたが（図表 6）、ここで重要な課題になってくるのは、タイプにマッチした学生個々の課題設定とその支援である。問題意識をもった学生は次に踏み出そうとしている。さらに、課題解決策を明らかにし、具体的行動を掲げている学生もいるが、それ自体が、本当に学生の課題克服につながる施策なのかを確かめるコミュニケーションが取れないまま本科目の授業が終わっている。これらは授業の課題であるとともに本科目の限界でもある。この限界に対しては、本科目内という考えではなく、キャリア教育担当教員とゼミ教員への申し送りや関連部署との接続によって課題解決の方法を議論しなければならないだろう。ひとりの教員完結型ではなくプロジェ

---

5) 大学生生活を変える必要性をあまり感じなかった7.0%、感じなかった3.0%。

図表 6 大学生生活問題意識分類とタイプ



出所：筆者作成

クト型で解決できるのではないかと考える。教養科目や専門科目ではなく、1科目完結型でないキャリア教育だからこそ、解決にむけての施策が肝要である。

## 7. 分析結果 2（調査 2）——スキル・能力開発——

つぎに、2点目の到達目標について議論を行う。本科目では、5つのカテゴリー（講義形式、PBL、アクティブ・ラーニング、先輩講話、ポートフォリオ）を展開する過程と結果から自信創出力及び自己効力感につながる授業内での成功体験を通して基礎力を概観し、涵養することを目的とした授業設計を行ったが、設計意図に基づいた結果につながっているかを検証する。

まず、キャリア教育の本科目の授業を通して、自信創出及び自己効力感を高める契機になった記述内容を明らかにし、それぞれに該当する基礎力について議論を行った。尚、議論を行うにあたって、具体的な教示文は「本科目の複数の課題を通して、取り組むことが難しいと感じていたことで、やり遂げたこと、成功体験として感じたことについて記述してください

い」とし自由記述式で求めた。先述したが664名から回答を得た。

## (1) 方 法

まず、664個（名）の自由記述内容に出現する頻度の高い単語に着目して、同じ単語が含まれる自由記述内容をまとめあげた。例えば、「新聞を読む習慣ができた」「物事を整理して考える習慣ができた」といった自由記述内容は「習慣」という単語が出てくるという点で類似の事に関する記述であると見なして同じ基礎力とした。また、他の記述内容について、例えば「チームで協力して1つの課題について取り組むことができた」「難しいと思っていた社会人インタビューを期限内に行うことができた」等に関連する記述は「課題解決力」とした。同じ視点で、「主体性（積極性）」「コミュニケーションスキル」「行動持続性（習慣力）」「対人基礎力」「発言力（発信力）」「計画力」「ストレスコントロール」とした（図表7）。尚、「コミュニケーションスキル」は、社会人基礎力及びジェネリックスキルの能力分類には示されていないが、学士力には汎用的技能として紹介されている。また、自由記述の単語で多く使われていた。つづいて、記述において親和力、協働力、傾聴力等が分散されていたが、ジェネリックスキルのコンピテンシースキルの中のひとつの領域である対人基礎力の分類に該当するため「対人基礎力」とした。

つぎに、自信創出につながった要因を分析するために基礎力の枠を外し、記述内容の数値が高いものを抽出し、涵養されたスキルと能力が5つどのカテゴリーから開発されていったのかを考察した。

## (2) 結 果

本科目の授業内での成功体験とその成功体験によって涵養されただろう基礎力（社会人基礎力、ジェネリックスキル、学士力）を整理し、664個の自由記述内容を検証した結果、43の記述内容にまとめられ8つの基礎力に分類された（図表7）。最も涵養されたのは課題解決力300個（45.2%）、つ

## 山本：大学初年次におけるキャリア教育科目の授業設計と展開に関する一考察

図表7 キャリア教育科目授業内成功体験と涵養された基礎力

基礎力と記述内容		A	B	C	D	E	合計
1	課題解決力	58	60	82	48	52	300
	チームで協力して1つの課題について取組むことができた	15	19	43	11	13	101
	難しいと思っていた社会人インタビューを期限内に行うことができた	25	20	25	12	9	91
	PPTを皆で仕上げた	13	15	8	21	25	82
	授業における複数の課題を全てやり遂げた	1	4	1		2	8
	代表に選ばれた	1	1	1			3
	大学生活でやるべきことを考えることが出来た(考察)	1			1	1	3
	課題発見力がついた	1	1			1	3
	PPTを時間内でやり遂げる行動力がついた			2			2
	チームの課題を達成できた				1		1
	PPTのグラフを作成することができた					1	1
	社会人に必要なスキルを知ることができた			1			1
	情報収集力がついた				1		1
	様々な視点を身につけることができた			1			1
	自信をもてるようになった				1		1
ラーニングヒストリーを書きながら自己分析ができた	1					1	
2	主体性(積極性)	24	14	24	17	15	94
	チームビルディングに積極的に参加できた	21	11	16	8	14	70
	リーダーシップを発揮することができた	1	2	7	2		12
	チームビルディングに目的意識をもって積極的に参加できた		1		3		4
	PPT完成に向けて貢献ができた	1			2		3
	将来のことを積極的に考える機会になった	1			1	1	3
	チームビルディングにおいて積極的に参加し社会人基礎力が身に付いた				1		1
チームビルディングにおいて主体性をもって他社に働きかけた			1			1	
3	コミュニケーションスキル	14	15	24	11	14	78
	チームビルディングでコミュニケーションがとれた	11	10	20	7	14	62
	コミュニケーションスキル能力がついた	3	5	4	4		16
4	行動持続力(習慣力)	26	7	9	8	19	69
	新聞を読む習慣ができた(ホームワーク)	26	7	8	8	18	67
	物事を整理して考える習慣ができた					1	1
	15回の授業を休むことなく出席した			1			1
5	対人基礎力	7	15	13	7	9	51
	チームビルディングを通して初対面の人と仲良くなれた	1	4	3	2	1	11
	人の話を聴けるようになった(傾聴力)	1	3	3	2	1	10
	協調性が身に付いた	2	2		3	2	9
	普段接点のない人と接しても話ができるようになった		1	3		1	5
	人見知りだったが初めての人と会話できるようになった	3		1		1	5
	チームワークの大切さを学んだ(協調性)		2	1		1	4
	授業を通じて友達が増えた		2				2
	人間関係を築くことができた		1			1	2
	相手の考え方に対して意見を持ちながら聴けた(傾聴力)			1			1
人と関わるのが楽しくなった					1	1	
他者と話すことへの恐怖心を取り払うことができた			1			1	
6	発言力(発信力)	10	11	13	1	3	38
	自分の意見を言えるようになった	8	11	13	1	3	36
	全員の前で話ができる	1					1
	全体をみて発言することができた	1					1
7	計画力	1	1	4	22	3	31
	計画力がついた	1	1	4	22	3	31
8	ストレスコントロール		1		2		3
	ストレス耐性がついた		1		2		3
		140	124	169	115	116	664

出所：筆者作成

※A・B・C・D・Eはクラス(学科)。

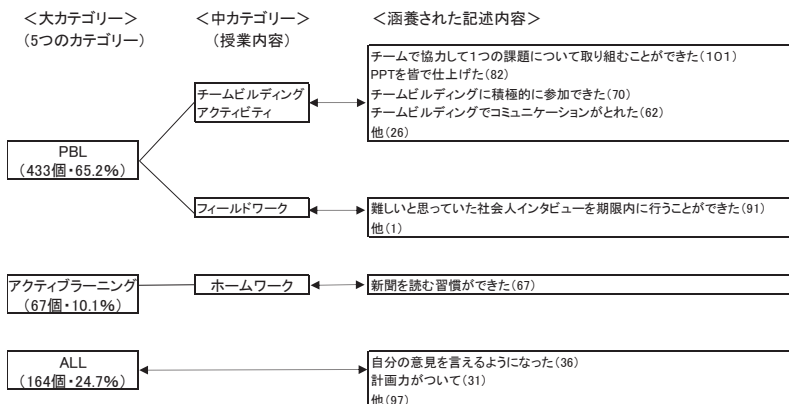
づいて、主体性94個 (14.2%)、コミュニケーションスキル78個 (11.7%)、行動持続力 69 個 (10.4%)、対人基礎力51個 (7.7%)、発信力38個 (5.7%)、計画力31 個 (4.7%)、ストレスコントロール 3 個 (0.1%) となった。

つぎに、涵養された記述内容が5つのどのカテゴリーから開発されていったのかを明らかにする。まず、自信創出につながった要因を分析するために8つの基礎力の括りを外し数値が高い記述内容を抽出した結果、①チームで協力して1つの課題について取り組むことができた (101個 / 15.2%)、②難しいと思った社会人インタビューを期限内に行うことができた (91個 / 13.7%)、③PPT (パワーポイント) を皆で仕上げた (82個 / 12.4%)、④チームビルディングに積極的に参加できた (70個 / 10.6%)、⑤新聞を読む習慣ができた (67個 / 10.1%)、⑥チームビルディングでコミュニケーションがとれた (62個 / 9.4%)、⑦自分の意見を言えるようになった (36個 / 5.4%)、⑧計画力がついた (31個 / 4.7%) となった。

さらに、涵養された記述内容に該当する授業内容 (中カテゴリー) を考察した後、該当する5つのカテゴリー (大カテゴリー) を明らかにした。例えば、「パワーポイント」という記述内容については、中カテゴリーはチームビルディング・アクティビティ、大カテゴリーはPBLとした。しかしながら、「大学生活でやるべきことを考えることができた」「人の話を聴けるようになった」「コミュニケーション能力がついた」のように15回の授業を通し涵養されただろう内容は「ALL」とし大カテゴリーに組み入れた。これらからPBL (433個・65.2%) が基礎力を涵養するにあたって最も影響力があったことが明らかになった (図表8)。他方、4人に1人の学生が、複数もしくは全てのカテゴリーの影響を受けていたといえよう。よって、本科目の5つのカテゴリーのいずれかから影響を受け、基礎力が涵養されたと推察できる。



図表 8 5つのカテゴリーと涵養因子のマッチング



\* ALLとは、5つのカテゴリー全て。他は、3%以下の個別因子の合計数を表示している。

出所：筆者作成

## 8. 考察と課題

本稿では、2点について議論を行った。まず、就職活動を目的とした職業観や勤労観の育成だけでなく人生観にも焦点をあて、ビジネスシーン（ワークキャリア）やライフキャリアを想定し授業設計を行った本科目を通して、大学生生活とキャリアの連続性から大学生生活の重要性を議論し、学生の主観による現状評価を明らかにした。さらに、ワークキャリアとライフキャリアに肝要な自己効力感を高める機会を創りだし、授業の過程において涵養された基礎力を検証したうえで、本科目で展開している5つのカテゴリーの効果を図った。

1点目の大学生生活については、89.4%の学生が現状について問題意識をもっており、その要因は、「大学生生活の過ごし方（大学生生活自体）」「過去の行動・思考特性の反省」「未来（将来）の行動・思考特性の展望」「就職活動の準備」の4つの要因に分類され、その要因のタイプは、「無目的・無気力・無感情タイプ」「連続性把握タイプ」「学び重要性認識タイプ」「過去の

行動反省タイプ」「無計画反省タイプ」「無行動反省タイプ」「将来イメージ対策タイプ」「行動テーマ設定タイプ」「未来危機感タイプ」「就職活動準備タイプ」の10のタイプであった。これらは、学生自身ごとに抱えている課題が明らかになっただけでなく、今後の学生支援の施策を検討する上で貴重な情報になるだろう。

本科目の15回の授業において、学生自身の大学生生活の評価、問題意識の要因、要因を克服するための次なる行動について分析を行った。しかしながら、要因を克服するための次なる行動そのものが課題解決策につながっていくか否かに関しては検証できていない。また、課題解決策のための行動や思考の変化を見極める環境ができていない。これらの課題を解決するには複数の議論が必要である。本科目の授業では、課題を解決する設計までは組み込んでいない。しかしながら、学生が大学生活について問題意識をもつ契機をつくったままにしておくのは学生自身の成長を鈍化させるだけでなく、大学として、また、いずれ勤務するだろう企業や地域にとってもよくない。他方で入学後の1年間を振り返って充実した大学生活を過ごしていると自己評価できる学生を増やすための議論を行わなければならないだろう。4つの問題意識と10タイプを基にして初年次教育の再考とさらに、先の課題も含め議論を行わなければならないと考える。

2点目は、授業目的である自信創出力及び自己効力感を高めるために涵養された基礎力が8つに分類された分析結果についてである。特に、ビジネスシーンを想定した授業設計において、主体性がベースにあるという議論を行ったが、分析の結果「課題解決力」について2番目に「主体性」が涵養された基礎力であった。また、様々な場面において目的を成し得るために習慣化の重要性についても議論を行ったが、習慣化が4番目に涵養された基礎力であった。

本科目の5つのカテゴリーと記述内容の分析結果からチームビルディング・アクティビティを中心としたPBL授業の影響が65.2%と最も高かった。さらに、複数もしくは全てのカテゴリーを通して基礎力が涵養された学生

山本：大学初年次におけるキャリア教育科目の授業設計と展開に関する一考察  
が約4人に1人（24.7%）存在したことから授業設計の意図に基づいた本科  
科目の到達目標が達成されたといえよう。これらの結果を踏まえて、今後  
考察されなければならない課題は、涵養された学生の基礎力をさらに高め  
る環境を構築することである。そのために、本科目完結型ではなく、プロ  
ジェクト型組織の中で議論を行い、それぞれの学生が涵養された基礎力を  
さらに高める施策を検討しなければならない。他方で各学生達が本学科の  
履修を契機に、自主性及び習慣力などのキャリアスキルを高める授業改善  
が必要である。新たな授業改善を行い、新たな議論を展開していくことが  
今後の課題である。

## 参 考 文 献

- 上西充子（2006）『大学におけるキャリア支援・キャリア教育に関する調査報告書』  
法政大学大学院経営学研究科キャリアデザイン学専攻調査委員会  
五十嵐 敦（2008）「大学におけるキャリア教育の実践」日本キャリア教育学会（編）  
『キャリア教育概説』東洋館出版社，pp. 112-115  
梶原直俊（2009）「大学における創造的キャリア教育——『カード式デザイン法』に  
よるキャリア形成と就職支援」教育総合研究第2号，pp. 113-134  
川崎友嗣（2005）「大学におけるキャリア教育の展開——学ぶ力と生きる力の教育」  
『大学と教育』，pp. 41: pp. 44-62  
川瀬隆千，辻 和則，竹野 茂，田中宏明（2006）「本学キャリア教育プログラムが  
学生の自己効力感に及ぼす効果」宮崎公立大学人文学部紀要第31巻第1号，pp.  
57-74  
岸岡洋介，山内一祥，泉谷道子，平尾智隆（2010）「学生生活の満足度を決定する要  
因——学生生活状況調査データ分析——」大学教育実践ジャーナル第8号，pp.  
8-15  
児美川孝一郎（2015）『まず教育論から変えよう』，太郎次郎社エディタス  
児美川孝一郎（2013）『キャリア教育のウソ』ちくまプリマー新書  
児美川孝一郎（2010）「特集：若者の『雇用問題』：20年を振り返る『若者自立・挑  
戦プラン』以降の若者支援策の動向と課題——キャリア教育政策を中心に」『日  
本労働研究雑誌』602号，pp. 17-26  
児美川孝一郎（2007）『権利としてのキャリア教育』明石書店  
下村英雄（2009）『キャリア教育の心理学：大人は、子どもと若者に何を伝えたいの  
か』，東海教育研究所

- 白井章詞 (2015) 「キャリア教育と学生の進路変更——地方の私立大学でのキャリア教育を事例として——」『キャリアデザイン研究』11号, pp. 87-96
- 神殿織江 (2010) 「大学の低学年におけるキャリア教育の経時の考察」経営戦略研究 第 3 号, pp. 171-182
- 高橋桂子, 石井藍子 (2008) 「大学生活・就職活動が自己効力感に与える影響」新潟大学教育学部附属実践総合センター研究紀要 教育実践総合研究第 7 号, pp. 47-55
- 田澤 実, 梅崎 修 (2013) 『大学生の学びとキャリア——入学前から卒業後までの継続調査分析——』法政大学出版社
- 花田光世, 宮地夕紀子, 森谷一経, 小山健太 (2011) 「高等教育機関におけるキャリア教育の諸問題」KEIO SFC JOURNAL Vol. 11 No. 2
- 藤岡秀樹 (2015) 「日本におけるキャリア教育の研究動向と課題」京都教育大学教育実践研究紀要第15号, pp. 249-258
- 南 愛 (2014) 「キャリア教育授業の内製化への取り組み——平成26年度「自立と体験4」授業実践より——」明星大学明星教育センター研究紀要第 5 号, pp. 161-164
- 吉村大吾 (2015) 「キャリア教育の体系化と PBL の導入」一貫連帯研究所紀要第 1 号, pp. 130-138
- 渡辺三枝子 (2005) 「大学における「キャリア教育」の意味を考える」, 文部科学教育通信, pp. 118: pp. 22-23
- Graunk, Steven S. and Sherry A. Woosley (2005) “An Exploration of the factors that affect the Academic Success of College Sophomores” *College Student Journal*, 39 (2), pp. 367-376